

# 教育長だより



鹿児島県三島村教育委員会  
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県内の小学校の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で10年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

「三島村に、なぜジャンベなのですか？」とよく聞かれます。ジャンベとは、西アフリカに伝わる民族打楽器です。

村の子どもたちは、みんなジャンベを叩くことができます。アフリカンダンスも踊ります。港では、ジャンベのリズムでお出迎え。三島村は知る人ぞ知る「ジャンベの島」なのです。

三島村が、西アフリカのギニアと交流を始めて26年。日本の小さな離島の村と西アフリカ、そしてジャンベ。この不思議な組合せに「なぜ？」と疑問をもつのは当然なことです。

それは1994年、日本各地で競うように特色ある村おこし、町おこしが展開されていた頃、村おこしの一つとして実施した「三島っ子ジャンベツアー」がきっかけです。西アフリカ・ギニアのジャンベの神様と称されるママディ・ケイタさんが日本ツアーに来日した際に、島の子どもたちにジャンベを教えながら、一緒に演奏ツアー（夏休み18日間）を行うという奇想天外な事業。実はその事業を担当したのは、当時、派遣社会教育主事として村教委に派遣されていた私でした。当初は、この交流は単発的なイベントで、その後も交流が続くとは考えてもいませんでした。村おこしといっても、資源が乏しい村では小刻みにジャブを繰り返すしかない状況。もしかして話題になればと取り組んだ事業です。しかし、NHKのドキュメンタリーで放映されるなど、その反響は想定外に大きく、会心の一撃となったのです。その後も毎年、島を訪れることになったママディさんが蒔いたジャンベの種は、さまざまな色の花を咲かせ、しっかりと根付いています。

ギニアとの交流は少しずつ深まり、東京オリンピックではホストタウンを務めることになって、ギニア大使も島を訪問してくださいました。更に昨年夏、村の子どもたちは、横浜で開催された「アフリカ国際会議」関連のイベントに出演。「野口英世アフリカ賞」の授賞式では、天皇皇后両陛下御臨席の下、総理やアフリカ諸国首脳の前で演奏するという望外の貴重な体験をすることができました。

また、去年は「ママディさんの村の子どもを島に呼びたい」という長年の夢もかないました。過去に三島村の子ども代表4人がギニアの村を訪問しています。三島村長もギニアの村に診療所を寄贈するために訪問しましたが、そのときに子どもたちを招待することを約束していたのです。島を訪れたギニアの子は、以外にもジャンベを叩けなかったので三島の子が彼らにジャンベを教えました。まさかの逆輸出。その不思議な逆転の光景は、何とも興味深いものでした。



ギニアの村訪問(筆者R1)

遙かな海を越えた二つの村の交流は、最初はすぐに切れそうな細い糸のようでした。しかし、何事も継続することが力となり幸運を引き寄せるものです。26年を経て、強い糸へと進化していったのです。国際化が叫ばれる中、この小さな村のちょっと変わった交流も、国際交流の一つの面白いモデルになればいいと思います。



中学生ジャンベ演奏